

「藤田嗣治と戦争」研究序説

—未公開書簡をめぐって—

林洋子（京都造形芸術大学）

藤田嗣治(1886-1968)については2000年前後から日本とフランスでの展覧会や出版が相次ぎ、まず伝記研究の再編が進展したのち、美術史的な作品研究が続いている。2009年春の藤田君代夫人の逝去後、彼女が画家の死後40年守ってきた「藤田旧蔵品」の大半は散逸せず、かなりの数の作品がポーラ美術館とフランスのランス市立美術館、日記・写真などの資料類が東京藝術大学、画家が手がけた挿絵本を含む旧蔵書が東京国立近代美術館アートライブラリに収蔵された。1940年代後半から最晩年にかけての作品と資料が中心で、今後、当該時期に関する実証的な研究の進展が期待されるが、日記類の翻刻、公開には当面、時間を要すると思われる。

こうした作家旧蔵品とは別に、近年、藤田が書いた手紙の再発見の報が日本、フランス、アメリカで目立つ。彼が生涯に出した手紙の数は膨大、かつかなりの長文で、なかでも数が多く、内容上も重要なものには、1910年代の最初の妻とみにあてた約180通（日本語）、終戦直後から最晩年まで日系アメリカ人画家ヘンリー杉本にあてた約50通（日本語）、ほぼ同時期に仏人ジャーナリストにあてた約30通（仏語）がある。20年代に三番目の妻ユキにあてた手紙（仏語）、進駐軍関係者フランク・シャーマンあて1949年の手紙（英語）なども知られ、一部の公刊が進んでいる。また、昨年、戦中の疎開時に世話になった個人あての手紙が紹介された（高島由紀「岡沢家資料に見る疎開期から帰仏期の藤田嗣治」『近代画説』19号、2010）。発表者は、縁あってこれらとは異なる書簡群を預かった。滞仏経験を持つ、ある日本人画家にあてられた、1944年から最晩年までの約50通で、心を許した一世代若い同業者への手紙には多くの情報が盛り込まれている。一連の書簡類の記述が相互補完的に証言するのは、終戦後1940年代後半の東京で離日を画策する藤田の姿である。

本発表は藤田と戦争を考える試みとして、まず藤田の「二つ」の戦争体験、ならびに作戦記録画制作について手短かに概観する。母国で作戦記録画の制作に邁進した「アジア・太平洋戦争」だけでなく、20代後半に無名の異邦人としてパリで遭遇した「第一次世界大戦」体験の重要性を指摘したい。それを踏まえ、今回初公開となる疎開先からの第一便から、終戦後、都内やニューヨーク滞在を経て1950年2月のパリ帰還までの15通にしぼって検討する。終戦直後から1949年3月の離日までの日本脱出工作を知る上で、既に確認された事実関係やヘンリー杉本あての手紙等と照合することで、これまで不分明だった離日までの具体的な「プロセス」や藤田本人の「解釈」を押さえる機会としたい。この作業は今後の藤田日記の判読だけでなく、「戦争画/問題の戦後処理」という大きな課題への一助ともなると願う。なお、今回は資料紹介と分析が中心となり、具体的な作品研究には至らないが、同時期の制作、なかでも「1949年のニューヨーク」滞在時の制作と環境にも触れたい。